

佐賀県

産地レポート

タマネギ

タマネギ栽培が盛んなJAさが杵藤エリア白石地区 玉じまりのよさと作りやすさで「ボルト」を導入

佐賀県農業協同組合
杵藤園芸センター園芸指導課 課長代理 林 智寿



甲高で玉ぞろいのよい早生種「ボルト」。
玉じまりもよく色つやも良好。
暖地では4月中旬から収穫可能。草姿立性で栽培しやすい。

栽培したのが始まりで、その後生産の安定性、収益性の面から年々面積が増加しました。

現在ピーク時から減少したものの、約850名の部会員により、極早生、早生、中晩生の作型を約1000haで生産され、京浜市場へ3〜8月を中心として出荷を行っています。

気候変動によって 早生作型に課題も

白石地区でのタマネギの出荷は3月から極早生、4月中旬から早生作型（マルチ）の出荷となり、そこで出荷のピークを迎えます。早生作型まではタマネギの貯蔵性がないため、掘り取り後、天日乾燥や茎根切り処理を行い、管内3カ所の選果場を中心に選果選別を行い出荷となります。

近年、温暖化により年間を通して気温が上昇している傾向があり、当地区

白石町は耕地面積5,850ha、そのうち水田面積は5,640ha、畑面積は212ha、そのほとんどが干拓地からなる平坦地となっています。生産農家数1,490戸で比較的規模の大きい農家が多い地区です。

農業生産は、水稻・麦・大豆の土地利用型作物を中心に栽培され、「七タコシヒカリ」をはじめとする米・麦・大豆の集団栽培を進め、高い耕地利用率となっています。

園芸作物ではイチゴ・キュウリ・アスパラガスなどの施設園芸や、露地作物ではタマネギ・レンコン・キャベツ・レタスなどが栽培されており、特にタマネギ・レンコンは日本有数の産地となっています。

でもその傾向は顕著になっています。冬季が温暖で推移すると、生育量が過剰となり、大玉比率が高くなります。

収量が上がるという意味では望ましいことですが、当地区は青果販売を中心

地域概況



↑白石地区タマネギ圃場にて(筆者)。

平成19(2007)年4月、佐賀県内の8つのJAが合併し、JAさがが誕生しました。その中に杵藤エリア白石地区があります。白石地区は県南東部、有明海に面した白石町が管轄で、ここはタマネギ栽培が盛んな町です。

当地区でのタマネギ栽培は、昭和37(1962)年にさかのぼります。合併前の旧福富町で20名の農家が約6haを



↑白石地区試作の圃場。上は従来他社品種で下は「ボルト」。草姿立性で管理作業のしやすさがよくわかる。



↑白石地区タマネギ圃場の「ボルト」。倒伏ぞろい約1週間後が収穫の目安。



↑収穫された「ボルト」。一様にL球で中高にそろいよく仕上がっている。20kgのプラスチックコンテナに通常通り満杯に入ると、「ボルト」は重く感じるという声もあるという。

としており、大玉比率が高いと、家庭での消費に難が出るため、販売単価の下落につながります。また、マルチ栽培では、天候次第によつては玉じまりがやや悪いという場合があり、秀品率の低下という懸念もありました。

白石地区が「ボルト」に求めるもの

4月に収穫した後、出荷を行う作型に求められる条件として、以下の条件がありました。

- ①玉じまりがよい
- ②管理がしやすい
- ③売れ筋階級のL球にそろいやすい

「ボルト」は白石地区で令和1年より試作を行いました。

令和1年…6079kg(L率43%)圃場の都合により、やや早めに収穫

令和2年…6982kg(L率51%)同

と既存品種と収量に遜色なく過大に肥大しすぎないという結果となりました。また、栽培を行った農家、調査に携わった方々からも、しまりがよく、立性であり管理がしやすいとの評価をいただきました。

令和4年は多くの農家で栽培しはじめ、複数地点での調査結果では、約7000kg、L率60〜70%程度となりま

した。

また、20kgのプラスチックコンテナで運搬しますが、「ボルト」は通常通り満杯に入ると重く感じる、出荷箱のふたが閉まりやすいなどの利点もあがっていました。

地区ではマルチ栽培を推奨ポイントは適期定植

「ボルト」は決して草勢が強いというわけではなく、適期に定植、速やかに活着させ、初期生育を確保するということがポイントと考えます。また、作型はマルチ適応性が高いと考えられるため、当地区ではマルチでの栽培を推奨しています。

当地区での播種は9月23〜25日、定植時期は、11月15〜20日ごろを基準としています。12月初旬定植も可能ですが、乾燥や低温による活着遅れが懸念されるなら初期生育が不足するため、遅くとも11月末までを推奨しています。

注意事項としては早く収穫をしたいという意識から、早まき早植えを行うと抽苔の危険性が高まったり、葉数が増加して熟期が遅くなると過肥大になるため、地区の基準に合った栽培が必要となります。

また、既存品種に目が慣れ過ぎていた場合は、草勢が弱く見えてしまい追

肥を行いたくなりますが、多肥は品種本来の性質がなくなるとなるため、地区の基準で施肥は行います。

なお、立性で防除などの管理作業はしやすい品種ですが、病気に強いというわけではないため、他品種と同様にしっかりと防除は必要です。

高齢化で生産者は減少それでも機械化で栽培面積拡大を目指す

現在、高齢化により農家数が減少しています。春の極早生から、夏出荷の中晩生貯蔵タマネギを安定的に生産、出荷を行うことが重要と考えられます。

そのためには、収量性、品質、中晩生、貯蔵性はもちろんですが、消費者に求められる売れ筋階級のタマネギ生産が必要です。今後もこの条件を満たす品種とその特性を生かす栽培技術の模索を続けていきます。

また、生産者数は減少していますが、1戸当たりの栽培面積は拡大しつつあります。育苗方式は多くの農家が機械化に取り組まれています。収穫以降はまだ機械化の途上にあるため、機械化にあわせた出荷・貯蔵方法を進めていくことも重要です。

関係機関と一体になり、今後も面積維持拡大に取り組んでいきたいと思っています。